



いとう



海援隊旗(二曳きの旗)

<http://www.ryoma-kinenkan.jp>

以 心 ISHIN DENSHIN 伝 心

「手紙の世界」展

始まります

7月7日より企画展「手紙の世界―龍馬で古文書ことはじめ―」が始まります。副題にあるように、古文書を本格的に取り上げる展示ですが、普通の古文書の展示とはアプローチの手法が少し違います。本展の見どころを紹介します。

古文書の二つの楽しみ方

古文書と聞いて、どのようなイメージをお持ちでしょうか。「難しそう」「読む気がしない」……そんな声が聞こえてきそうです。古文書には必ず文字が書かれています。その多くが独特の字体なので、現代人は普通これを読むことができません。

古文書で一番重要なことは、「そこに何が書かれているか」です。書かれた内容を読むことで、知られていなかった多くの事実と接することができます。

歴史を学ぶ上での大きな楽しめといえるでしょう。ただし、それを正確に読み解くには、かなりの専門知識を要します。「難しい」と敬遠される大きな理由でしょう。でも、古文書の楽しみ方は、文字を読むことだけではありません。その周辺、つまり文字が書かれている紙に注目するのです。なぜ、この大きさ、この形の紙が使われているのか。なぜ、紙に色がついているのか。なぜ、こんな場所に文字が書かれているのか。じっくり観察すると、たとえ文字が読めなくても、そのまわりにたくさん「なぜ」がみつかります。これらの疑問を紐解いていくことも、古文書を楽しむひとつの見方です。

紙そのものに注目

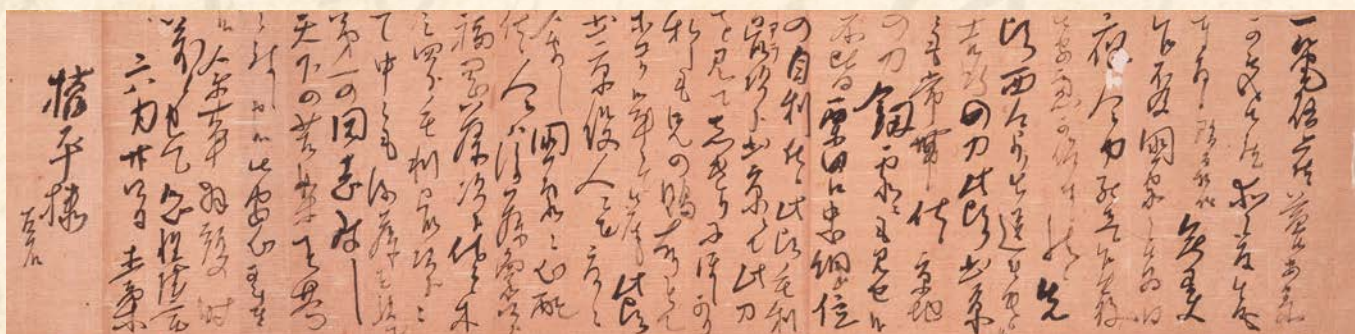
人々は、文書を作成するにあたり、どのような紙の使い方をしていたのでしょうか。歴史上連綿と受け継がれた伝統的な様式もあれば、それが変質した新しい様式もありました。さまざまな立場の人の手になる文書に、

どのような種類があったのか、龍馬が生きた時代を中心に、分かります。紹介します。

また、土佐藩には、藩の保護のもと、一部の紙漉きに伝えられた紙の染色技術がありました。それによつて生産されたものを七色紙と呼びます。七色が実際にどのような色だったのかをはじめ、謎に包まれた点が多いですが、土佐の色紙は、藩から幕府への献上物に選ばれたほどの品でした。そして、幕末の手紙には、この染色された紙が使われたものが少なくありません。藩の方針により、色紙が公用紙に指定され、実際に報告書等に使用されたのです。手紙として使われた色紙を展示し、その意義について考えたいと思います。

龍馬はたくさんの手紙を書き、貴重な関係資料として遺されていますが、龍馬の手紙を支えた幕末の紙文化・手紙文化とはどのようなものだったのでしょうか。展示をご覧になり、「手紙の世界」を体験してください。

高山 嘉明



桃色紙が使われた龍馬の手紙（部分）（弘松家所蔵、当館寄託）

コロナ対策



中国武漢市で「新型コロナウイルス」関連の肺炎の発生が報告されたのは、令和元年12月。その頃は、新しい年号での初めてのお正月や今年開催される東京オリンピックに期待が高まり、みんなが新しい年を楽しみにしていました。



それが、あれよあれよという間に、この「新型コロナウイルス」が日本に、世界中に広まり、人の移動が規制され、経済・生活全般が規制されるなど社会全体がストップする未曾有の惨事となっています。

高知県では、2月に対策本部が設置され、医療関係者の方々のご苦勞を氣遣いつつも、毎日、県から発表される感染者数に、不安になったり、安心したり、諸々の感情を感じておられた方も多かったのではないのでしょうか。

このような中で、当館では感染者数の増加に伴って、3月は17日間、4月10日から5月10日の約1か月間、急遽休館の措置を取り、お客様をお迎えする環境整備と拡大防止策を行いました。

5月に入って、高知県内での新たな感染者数も0人が続き、本県の緊急事態宣言も解除となったことから、5月11日から通常通り開館しています。とはいえ、まだまだ、油断は禁物。国や県、また多くの専門家からは、長期戦の心構え、対応の必要性と、十分な感染防止対策や日常生活の見直し、新たな生活様式が示されており、緊張は続きます。

このようなことを踏まえ、当館でも再開に伴って、ご来館者の皆様が安心して観覧できるように、その感染防止対策として、「職員全員のマスク着用と石鹸での手洗いと手指消毒の実施」「室内の換気と適時の手摺等の館内消毒の実施」「館内にソーシャルディ

タンスの確保等との注意喚起」等々、皆様をお迎えする準備を整えました。

例えば、最初に皆様をお迎えする受付や、出口のショップには、アクリル製のパーテーションを設置、職員はマスクの着用、金銭やパンフレットはトレイを活用して、直接、お客様との接触がないよう気を付けております。また、新館ホールの座席は1席離してお座りいただくようにしておりますし、換気が不十分なシアターコーナーは閉室、館内の長椅子も両端にお座りいただくよう表示をしました。不特定多数の方が利用される音声ガイドタブレットは当分の間貸出を中止とし、本館での名刺作成、パズルコーナー、アンケート等も、除菌・消毒を十分に行えないことから中止としました。

また、来館者の方々に対しましても、「ご入館されるときはマスクの着用」「入口で手指消毒をしてのご入館」「他の観覧者様との間隔を1メートル以上保つていただくこと」「ご一緒においでている方と大きな声での会話はしないこと」などの注意喚起を、入口や受付、その他、目につきやすいところに掲示し、ご協力をお願いしているところですよ。それとともに、館内のあらゆる場所に手指消毒液を置き、お気軽にお使いしていただけるようにしております。

私どもの考えつく限りの対策をしていますが、この新型コロナウイルス感染拡大防止対策を、いつまで講じなければなら

ねばならないのか、皆様が不安と不快感を与えないようにご覧いただくにはどのようにすればいいのか、試行錯誤の毎日が続いております。

これからおいでになる皆様に対して、過剰な反応や心配をすることなく、感染対策の基本であるマスクの着用や手洗いの徹底などを確実に行い、安心・安全にご来館いただけるようにお迎えしたいと、職員一同、今後も努め、皆様をお待ちしています。

溝渕 智栄子



坂本龍馬記念館の地名は、高知市浦戸城山で、長宗我部元親から山内一豊までが居城とした浦戸城址、名前の通り浦戸城の城山に在る。

「浦戸」地名考

浦戸という地名を、字のまま考えてみよう。

「浦」は湾状の海岸にある集落（漁村、港町）を指す。「戸」は、門戸の意そのまゝ。つまり、浦戸は土佐湾の支湾である浦戸湾内の漁村で、太平洋への出入り口にある集落だと解釈できる。民謡「よさこい節」の一節、「御豊瀬見せましょ浦戸を開けて」というように、土佐の海の玄関である。

その浦戸の地名が初めて登場するのは、平安時代中期にできた紀貫之『土佐日記』である。4年間の土佐国の国司の任務を終え、国府（現・南国市比江）を出立して、京に帰るまでの55日間を「男もすなる日記」として書き記したことは有名。

国府を出立して7日目の、承平四（934）年十二月二十七日「大津（現・高知市大津）より浦戸をさして漕ぎ出づ」。翌日には「浦戸より漕ぎいでて大湊（現・南国市前浜）をおふ」と記されている。つまり浦戸は、今から約1,100年前には既にあった地名だと分かる。

浦戸は、古くから海上交通の要所であった。

16世紀に、豪族の本山氏が浦戸の丘陵に浦戸城を築城するも、本山氏を破った長宗我部氏、関ヶ原の合戦後に入国した山内氏など戦国武将たちの居城となった。慶長八（1603）年八月に山内氏が大高坂城（現・高知城）に移るまでの12年余り、土佐領主の城山の北側に城下町・浦戸が栄えていたことは想像に難くない。

江戸時代の村落台帳『旧高田領取調帳』によると、幕末には、吾川郡浦戸村、勝浦浜（桂浜）村がある。アメリカ帰りのジョン万次郎が居候した、藩絵師・河田小龍の家は当時、浦戸町（現・高知市南はりまや町）にあったが、そこは城下に出た浦戸の人たちによる町であった。今では高知名物1×1のアイスクリン（水菓）の表示に「浦戸町」の名前がわずかに残る。

明治初（1868）年に勝浦浜村は浦戸村に合併され、明治22（1889）年には「浦戸村」という自治体に。昭和17（1942）年から、現在の高知市浦戸となり、桂浜、浦戸東、浦戸西、南浦、並の5地区と、記念館のある城山がある。

「浦戸伝説」

その浦戸東地区に生まれ育って80年近くなるTさんから「是非聞いてほしい」という話があり、過日お宅に伺った。

Tさんの家の前は、伏見稲荷を分祀したという、長宗我部元親夫人ゆかりの「稲荷神社」である。開け放した窓からは海からの風が心地よい。道を隔てた浦戸の漁協市場は、3年前に撤去され、小さな荷上場以外は更地となった。かつて1,000人の組合員で賑わった漁師町に人

影はない。そのためか、Tさん宅に入る浜風は、なお更にゆつたりと吹き渡る。明治22年生まれの祖母から聞かされたという話に、Tさんの熱が入る。

「この家の前には昔、長宗我部の別荘がありましてね。その後山内も来ましたが、それが、昭和になり、私が小さい頃には、川崎の別荘でした。御庭番がいて、回り廊下のある、それは立派なお屋敷でしたぞね。『観海亭』という何十畳もある座敷で、結婚式を挙げた人もいますよ」。

川崎とは、幕末に「浅井金持ち、川崎地持ち、上の才谷（龍馬の名家・才谷屋）道具持ち」と謳われた高知城下屈指の富豪のことである。かつて浦戸御殿と呼ばれた別荘は跡形もなく、門扉の中で木々が覆いかぶさっている。

祖母の代からこの家に住むTさんの話は続く。

「長宗我部のお屋敷を建てたとき、海に面した角地に離れ屋敷を建てようとしたそうです。眺望の良い離れを建てるはずが、波の力が強くて足場も流され、何度普請してもうまくいかない。そこで、若い生娘を人柱に立てたところ、足場も落ちんなくて離れが出来た。落ちんかったことから、その場所を今でも『オツチン』と呼びます」。「私の家の前から南の桂浜まで磯が続いていて、地元ではこ



稲荷神社下の石段＝高知市浦戸東地区

の辺りを磯崎とも言いますぞね」。

「祖母は小さい時、近所のおじいさんから、浦戸に長宗我部の埋蔵金があるという話を聞いたそうです。私は祖母の寝物語に何度も聞いた、朝日さす夕日輝く木の下に漆七桶数千両」という歌が、いまだに忘れられません。夢やロマンを感じませんか。そんな歌は各地にあると言われますが、幕末の頃でしょうか。桂浜の山のどこかに埋蔵場所を特定した役人が、白装束に身を包み、そこに囲いを巡らせて掘ったそうです。埋蔵金は出てきませんでしたが、これ以上掘ったら潮になると言うくらい掘ったとき、人工の石段が出て来たそうです。その場所は、桂浜水族館の近く、いや砲台のところ。はたまた灯台辺りだと、何人かで訪れたことがあります。Tさんの話は、浦戸への愛着と矜持にあふれていた。

ある歴史家が「歴史はリーダーによって作られ、名もなき民衆によって継承される」と言った。名を遺す人だけに、歴史があるのではない。一人ひとりの中に、歴史があり、継承される思いがある。地元の人々の伝承に耳を傾けることも、学芸員の務めだろう。そんな中で、もしかすると歴史の「埋蔵品」に行き当たるかもしれない。



“つわものどもが夢のあと”
木々が重なる別荘の門扉＝同

龍馬の手紙

07

もつとも長〜い手紙

(慶応3年6月24日書状 乙女・おやべ宛)

龍馬が筆まめで、手紙の現存数も多いことは周知の通りである。

また、自身が関わっている事柄の途中経過も詳しく書かれているので、彼の活動をたどりやすい。

現存する龍馬の手紙なかで、もつとも長いものが、慶応3年6月24日書状 乙女・おやべ宛（京都国立博物館所蔵）である。その長さは、なんと504.4cmである。

内容も、義甥坂本清二郎の近況、後藤と組んで利をむさぼるとは何事と非難する姉乙女に対し「廿四万石を引て、天下国家の御為致すがよろしく」と啖呵をきるくんだり、土佐を出て龍馬の元へ行くとする姉を必死になって思いとどめようとするくんだりなど盛りだくさんである。だが、ひらがなを多用し、目の前で対話しているかのように思える易しい文体なので、内容の面白さに引き込まれ、文章の長さが苦にならない。

これと対極なのが、兄権平宛の手紙である。

権平への手紙は、漢字を多用した、かしこまった文体で、当時の政治動向も折にふれて報告している。

この違いは、乙女は幼いころからかわいがってくれた遠慮のいらぬ存在であるのに対し、権平は坂本家当主という畏敬の念をもつ存在であることによる。

文体一つとっても、龍馬が、相手の立場に合わせた接し方を心得ていることがわかる。そして、乙女をなだめるくんだりも、手紙の半分以上の長さを使って、女一人で国許を飛び出す行為が無謀であることを当時の倫理観や社会の規則を説いて論じている。

この2点からは、龍馬は小説で描かれるような無頼派ではなく、社会性と対人関係のTPOを心得た常識人であることが浮かび上がる。これは家族によるしつけの賜であろう。それゆえ、乙女からの突飛な申し出には心底驚いただろうと想像する。

豊田 満広

(中岡慎太郎館 係長・学芸員)

私の
おすすめ

No.7

「本館」

今回私がおすすめするのは、高知県立坂本龍馬記念館の「本館」です。

私が記念館で働き始めたのが、平成4（1992）年8月。「本館」とは約28年の付き合いになります。おのずと愛着がわくもので、「本館」に一歩足を踏み入れると気持ちが楽になる気さえるのです。

高知県立坂本龍馬記念館は、平成3（1991）年11月15日に開館しました。

そして、平成30（2018）年4月21日のグランドオープンで、1つの館から2つの館になった記念館は、既存の建物を「本館」、新たな建物を「新館」と呼ぶようになり、連絡通路で繋がれた、今の形になりました。

館の入口は「新館」にあります。「新館」2階の各展示室をご覧いただきたい



た後、自動ドアを抜け、連絡通路を渡ると「本館」2階と繋がります。

「本館」2階の展示室は、ガラス張り、斜張橋のようにケーブルで吊られた構造となっており、風の強い日など揺れる事もあります。

「本館」は中の展示もさることながら、外観もぜひ見ていただきたいポイントです。

「本館」を出て、建物沿いに道を下ると駐車場に出ます。そちらにある「くじらの時計」辺りから「本館」をご覧になってみてください。記念館として紹介される建物の写真はここから撮られたものです。また西側はミラーガラスとなっており、見る角度によってかわる四季折々の景色を映し出しています。

ぜひ記念館にお越しの際には、「本館」の中も外も存分に楽しんでお帰りください。

渡辺 曜子

令和2年度

連続講演会

「幕末再考―変革への計と践」

各回のテーマを少しご紹介しましょう。

①6月27日(土)

「幕末の朝幕関係―特に朝廷の視点から―」

(高山嘉明・当館学芸員)

江戸幕府から厳しく活動を制限されて

いた朝廷は、幕末、何をきつかけに、どのような経緯で政治浮上することとなった

でしょうか。対立する幕府と朝廷、というステレオタイプでない両者の関係性について、幕末京都のパワーバランスを軸にお話します。

②8月29日(土)

幕末佐賀藩の近代化と鍋島直正

(藤井祐介氏・佐賀県立佐賀城本丸歴史館学芸員)

近代化のトップランナー、佐賀藩は日

本初の鉄製大砲製造や蒸気船建造に成功しました。佐賀藩が、そうした当時の最先端技術を有することとなった10代藩主鍋島直正の考えや動きを中心に、教科書には載らない佐賀藩の存在感をお話いただく予定です。

③10月24日(土)

「志士最後の生き証人」田中光頭の功績

(藤田有紀氏・佐川町立青山文庫学芸員)

青山文庫創設の立役者の一人である田

中光頭は激動の幕末期を生き抜き、後世は幕末という時代そのものを残そうとした人物です。彼を激動の時代に身を投じさせた、当時の土佐の状況もふまえて、彼の考えや功績などをお話いただく予定です。

④12月12日(土)

毛利敬親の藩政改革

(小山良昌氏・毛利博物館顧問)

幕末の長州藩主毛利敬親は財政再建、文武奨励、西洋式軍隊の訓練などに取り組み、その結果、長州藩が幕末期に強い存在感を示すこととなりました。敬親はあまり賢明でない殿様というイメージが流布していますが、藩政改革に取り組んだ実像をご紹介いただく予定です。

⑤令和3年2月27日(土)

幕臣小栗上野介のビジョン

(高橋敏氏・国立歴史民俗博物館名誉教授)

明治維新後、幕臣たちは敗者となり、結果として忘れ去られてきたといえます。しかし、本当に、幕府は悪で、前近代的だったのでしょうか。近代日本の幕開けに際し、多大な活躍をしながらも、朝敵とされ斬首された小栗上野介が抱いていた展望につ

いてお話いただく予定です。

今回はこの5つがテーマですが、他にも興味深いテーマは数多くあるでしょう。連続講演会を入口に、歴史への興味、関心をさらに深めていただければ、と思います。

河村章代

お知らせ

「令和元年度連続講演会講演録」(非売品)ができました。高知県内図書館等で閲覧いただけます。また、当館本館の図書コーナーでも閲覧いただけます。ぜひご覧ください。

「令和2年度連続講演会講演録」は令和3年5月頃に発行、ミュージアムショップで有料販売予定です。

- 会場／新館ホール
- 定員／各回50名
- 時間／各回ともに13時半～15時半頃
- 要事前申込・先着順



昨年度の講演会の様子

「坐忘」と「胆識」

— コロナ禍の中で —

新型コロナウイルスの感染拡大を受け、4月号の当コラムで紹介した桂浜の龍馬像から当館のシェイクハンド龍馬像前までの聖火リレーは中止となった。

また、1か月に亘って休館することとなり、企画展に向けた県外の文化施設からの資料の借用や、講演会、ギャラリートークの取り止めなど、様々な計画の変更を余儀なくされた。

この間の御来館を予定されていた皆様にはご迷惑をおかけしてしまった。

休館中は、職場での三つの「密」を避けるために、在宅勤務や館内での職員の分散などを行いながら、開館に向けた準備や普段後回しとなっている作業などを進めることができたが、休日のステイ・ホームの要請もあって、個人的には、時間の余裕(?)が出来たことで、これまで「不急」の範疇に分類させていただいた書籍(失礼の段、何卒ご容赦を。)の数々に触れることができた。今回は、そうした中で、予期せぬ災禍への対応という点でも大事にしなければならぬ表題の二つの言葉に出会ったので、ご紹介したい。

まずは「坐忘」。これは、龍馬が師と仰いだ勝海舟の言葉で、明治31年に刊行された「水川清話」という勝語録とも言われる冊子に出てくる。「坐」は座る、あるいは、いながらにして、何もせずという意味であり、「忘」と一体になって、静座して目の前にある現実を忘

れ、雑念を除くということのようである。大きな変動があり、計画どおりに物事を進めることが出来ず、不測の事態に直面する時の心構えである。曰く、「何事もすべて忘れてしまつて、胸中惘然として一物をとどめざる境界に至つて、始めて万事万境に應じて縦横自在の判断が出る」、「心を明鏡止水のごとく研ぎ澄ましておきさえすれば、いついかなる事変が襲うてきても、それに処する方法は、自然と胸に浮かんでくる」。そして、「かの広島や品川の談判も、ひつきようこの不用意の用意でやり通したのさ。」と語っている。なるほど、思わず頷いてしまつた。ただ、こうなるには「平生の修行さえ積んでおけば」との条件が付いていて、得心はしたもの、コロナ騒動の中で、「体どうなるんだろう」、「あなつたらどうしよう」などと無暗に気に病む今の自分には、とても、とても・・・である。

なお、「談判」とは、ひとつは、第二次長州征討停戦を巡る長州藩の広沢真臣や井上馨との宮島での会談であり、もう一つは、江戸城総攻撃を前に、高輪や田町の薩摩屋敷で行われた西郷隆盛との会談を指している。

さて、次に「胆識」である。この言葉を見つけたのは、2年ほど前に、熊本県の松崎昇さんという方から寄贈いただいた『あしたへの論語—サラーマ

ン三〇〇〇日の「人間学」探求—』の中である。この900ページにも及ぶ大著は、学而編に始まり堯日編に至る論語の500を越える各章について、逐次ユーモアを交えながら、親しみやすく、読みやすい解説を加えられたもので、随所に龍馬や西郷さん、そして吉田松陰先生などに纏わるエピソードや語録などがとりあげられている。こうしたこともあって、上梓されて間もない頃に当館に御寄贈いただいたものだと思察しているのだが・・・。

松崎さんは、孔子の高弟の一人とされる子貢に対して「胆識」を感じると述べられ、ある陽明学者の方の「物を多く知つていふことだけでは単なる知識の寄せ集めに過ぎない。しかし、それが数々の実践として練られると見識へと変わる。さらに、それが繰り返し練られると遂には自然に胆識と言われるものへと変わる」という言葉や、ある医師の方の「侍魂のようなものがすなわち「胆識」というものじゃないでしょうか・・・知識や経験の上に乗つかつてドンと肝を据える。そういう心境にならないと本当の「胆識」というものは生まれてこない・・・」といった説明などを紹介されている。

これまた納得であるが、私など凡人が、そうした高みに昇ることは至難の業であることは論を俟たない。因みに、龍馬が論語を学んだかどうかは不明のようである。ただ、大

正15年に本県出身の歴史家岩崎鏡川によって刊行され、その後の龍馬研究のバイブルの一つとされる「坂本龍馬関係文書」では、巻頭で、「先生は平生老子を耽讀したとのことであり、其飄逸虚無の趣、これによりて得たものと思はれます・・・先生の書翰中には意外にも時々經典の成句に接することがあります。」と述べられている。

初老を迎えた私にとっては今更の感ではあるが、コロナ禍の再燃も懸念され、また、変化が激しく、見通しが難しい時勢にあつて、僅かずつではあつても「胆識」の涵養に努め、「坐忘」の心境に近づきたいと思う日々である。



企画展を担当すると、展示や関連企画の準備として大々さまざまな調査をおこなう。その成果は、解説文や論文に活かされることもあれば、諸事情によりそれから漏れることもある。会期が終了すれば、一旦そのテーマは頭から離れるが、逆に、次の展示の調査を進めるなかで、過去の展示に関連した新たな知見を得ることもある。その時、なぜあの展示に活かせなかったのかと後悔するのである。時すでに遅しではあるが、この場を借りて、私の直近の後悔を表明する機会とさせていただきたい。

郷士が担った 京都の治安維持

令和元年度の企画展「長宗我部遺臣と土佐の郷士」では、「郷士年譜」（高知県立高知城歴史博物館所蔵）という資料を展示した。これは藩からの指示にもとづいて郷士が提出した各家の履歴書で、先祖代々の事績が記されている。過日これを精査する機会があったが、その際、調査の目的とは関係のない次の記事が目にとまった。無名の郷士というべき、山下登一郎という人物の事績の一節である。

「京都警衛の御用を命じられ、元治元年3月25日出発、上京した。清和院門の番を勤めていたところ、7月18日夜より大乱となった際、大砲掛に任ぜられ、そのまま取締の任務を続けていたが、7月24日清和院門を引き揚げとなり、大坂陣屋詰めを命じられ、木津川口の番を勤めた。同年11月御役御免となり、帰国した。」（「郷士年譜」45巻、意訳）

この記事に接して私が思ったのは、前年の平成30年度に担当した企画展「御所をまもった土佐の士」のことである。その展示等において明らかにできなかった重要な事実が、この短い記事にたくさん詰まっていたのである。そのうち一点のみ記すと、文久3年5月より土佐藩が命じられた清和院門（御所の出入口である九つの門のひとつ）警衛の要員に郷士が充てられたことは、当然の可能性として指摘はしたが、具体例は見つけられなかった。この例こそ、まさにそれである。

坂本権平の上京

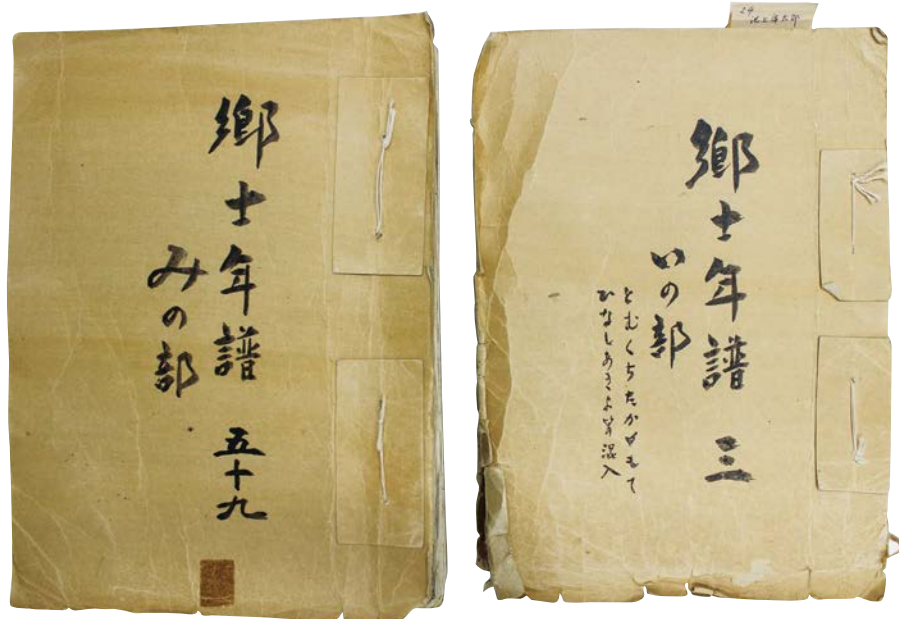
同じく「郷士年譜」のうち、龍馬の兄坂本権平が明治3年に藩へ提出した「年譜書」がある。これの存在は有名で、『坂本龍馬全集』という史料集では活字で読むことができる。そのうち、権平の事績として、次の一節がある。

「文久3年1月27日、臨時御用での京都行きを命じられた。同年10月、兵之助様の御供を命じられ、帰国した。」（「郷士年譜」55巻、意訳）

事実関係として、文久3年1月に臨時の御用（仕事）を命じられて上京、10月に山内兵之助（容堂の弟）の御供として帰国したことが明らかとなる。ちなみに、いわゆる脱藩の身であった龍馬が文久3年3月20日に姉乙女に宛てた手紙には、今後の自身の生き方について、当時京都にいた「あにさんにもそふだん」したと書かれている。

さて、問題は権平の臨時御用の内容である。これも、「御所をまもった土佐の士」展の内容との関連が考えられる。文久2年頃より土佐藩は本格的に京都へ進出し、朝廷からは、薩摩・長州両藩とともに当地の治安維持を担う存在として期待された。その後、上に述べたように清和院門警衛が命じられるが、その現地責任者こそ、権平が帰国の御供をしたと記される山内兵之助だったのである。権平に与えられた臨時御用が、京都警衛への従事を含むものであったことは大いに考えられるだろう。坂本家も京都警衛の動きと無関係ではなかったことになるのだが、展示でこの事実を紹介するには至らなかった。

研究に終わりはないなどと高説を垂れるようなレベルの話ではなく、むしろ成果の不完全さを反省しなければならぬ。適時取りこぼしのないようにすることが一番ではあるが、それがなかなかできない以上、ひとつのテーマに一区切りがついた後も、それについてのアンテナは常に張っておきたいと改めて自戒するところである。



「郷士年譜」（全67巻のうちの一部）の表紙

■「龍馬と船」

海の見える・ぎやういでは、現在「幕末の志士 人気ベスト10」展を9月30日まで開催しています。展示には人物写真と共にその人物を選んだ理由も添えてあります。いつ終息を迎えるか分からない新型コロナウイルスの現状ですが、幕末の時代にも新しい明るい未来を信じ生きていた人々のように、ご自分なりの人物を選び、前向きなエピソードを探してみると、元気がでるかもしれません。

そして、同会場東壁面側では、6月23日まで開催されていた企画展「幕末と船」展に因んで、黒船など、幕末にまつわるボトルシップ7点とNHK大河ドラマ『龍馬伝』（2010年1月～11月放映 脚本：福田靖／チーフ演出：大友啓史）で小道具として使用された船模型を展示しています。

この模型は、ドラマの中で、主演の坂本龍馬（福山雅治さん）が来航した黒船を見て、「黒船はどういう仕組みになっちゃうがやろう」と作ったものです。

嘉永6年（1853年）、実際龍馬が目にしたペリー提督率いるアメリカ合衆国艦隊の黒船は、サスケハナ号（旗艦／蒸気船）・ミシシッピ号（蒸気船）・サラトガ号（帆船）・プリマス号（帆船）の4隻でした。

ドラマの中では、龍馬が巨大な黒船を初めて目にした時の衝撃や、言

葉にし難い感動と興味を、船作りに没頭した姿で描かれていたのを思い出します。

模型は流木の船体に外輪を着け、木の枝を舳として紐で結び、和紙を枝に貼った3本のマストを立て、味わい深い素朴な作りになっています。

ところで、皆さん「船首像」というのをご存じでしょうか？航海の安全を願って帆船の舳に取り付けた彫刻のことです。その歴史は古代ギリシャ・ローマ時代の船にまで遡るそうです。

船首像には信仰の対象などを彫ったものから、カティ・サークの妖精、女神、鷲などの像がみられます。企画展「幕末と船」展では「西洋軍艦構造分解図説」の中にも船首像が説明されており、ちなみに「黒船 サスケハナ」には鷲が取り付けられていたようです。また、本館地下1階に展示してある「夕顔」には女神像が、ボトルシップにも細かい船首像が付いています。

7月は海の日もあります。龍馬が愛した船と海を、是非記念館へ観にいらしてください。

中村 昌代



展示風景



「龍馬伝」の船模型

職員紹介

「龍馬の魅力」

渡辺 芙月



5月より龍馬記念館に勤務しております。高知で育ち、大学卒業後は語学学習や観光業に従事するため海外で過ごし、今年2月に高知へ戻りました。日本の行く先を憂慮し、より良い日本を目指し奔走した坂本龍馬。その行動力や志の強さが龍馬の魅力の一つだと思います。記念館を訪れた方々が龍馬の生き様に触れ、志を新たに希望を持ち生きていける、そのお力になれるよう、日々努力してまいります。どうぞよろしくお願い致します。

入館状況

2020年6月20日現在

(1991年11月15日開館以来 28年218日)

◆入館者数 4,301,974人

■リニューアルオープン(2018年4月21日)以来 365,214人

編集後記

新型コロナウイルスの流行が続き、私たちの「日常」は新たなかたちに変化しつつあります。当館でも3月に2週間あまり、4月に約1ヶ月休館し、消毒液や受付の仕切り板設置など万全の準備をして再開館いたしました。状況が変動するため、今年の夏休みはたくさんの皆さまにお越しくささいといづらいいところもありますが、「飛騰」を通じての発信はこれまで通りつづけてまいります。(か)

館だより“飛騰”第114号

発行日 2020(令和2)年7月1日

発行 公益財団法人高知県文化財団
高知県立坂本龍馬記念館

(年4回発行) 表紙題字：書家 沢田 明子氏
〒781-0262 高知市浦戸城山830
TEL (088) 841-0001 FAX (088) 841-0015
<http://www.ryoma-kinenkan.jp>
「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください

開館時間 9:00～17:00 年中無休
入館料 一般 500円(企画展開催時 700円)
高校生以下無料

高知県・高知市長寿手帳所持者、療育手帳・身体障害者手帳・精神障害者保健福祉手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者(1名)は無料



「飛騰」は郵送料のみのご負担でお届けいたします。購読希望の方は120円切手をご希望回数(4回分まで)お送りください。
〒781-0262 高知市浦戸城山830 高知県立坂本龍馬記念館「飛騰」購読係 まで

私のテーマ

長崎、坂本龍馬之像 建立30周年式典に集う



長崎龍馬会顧問
柴崎 賀広

長崎の風頭公園に建つ「坂本龍馬之像」は平成元年5月建立から、昨年で30年を迎えた。

龍馬と海舟のレリーフ

5月18日、式典当日は荒天となり、銅像近くにある日矢太楼〔長崎龍馬会法人会員〕を会場として式典を開催した。

30年という節目でもあるが、今回の式典は特別な想いで迎えることとなった。銅像製作者である山崎和國先生が前年ご他界された。当会では毎年の除幕記念日に合わせて銅像磨きを行っているが、その時に先生が金粉塗

料で装飾をされることで龍馬之像の様相は年々輝きを増していた。製作者が30年もの間、銅像に装飾を加えてきたことの方が異例かも知れないが、先生は病床で式典に向けて記念グラスを制作、寄贈したいと語られていた。そこで、勝海舟の玄孫でガラス工房を営む高山みな子氏へ是非製作を依頼しようという先生と話を進めていたが、残念ながら企画の段階



山崎誠一氏



ダグラス・スティフラー氏

人物のご子孫としてこのお二人の他に、小曾根家当主小曾根吉郎ご夫婦、小曾根キクの曾孫小曾根克秀氏、同小曾根淳二氏、そして遠く米国から勝海舟の玄孫ダグラス・スティフラー氏もご参列頂いた。海舟が長崎で出会った女性との間に梅太郎が生まれる。その母親が若くして死去後、その梅太郎を江戸の勝家へ送り届けたのが小曾根家であり、その時に若き娘であったキクも同行したとのことである。

でお亡くなりになられた。それで、残された手書きのメモを基に高山氏とデザインを詰めて龍馬グラスを完成させ、交流会でお配りすることができた。また、式典の前に、山崎先生のご長男で画家である誠一氏から、先生が生前、制作されていた龍馬と海舟のレリーフが銅像製作所に保管されていることを知らされた。そこで、早速そのレリーフを受け取り、フランスから帰国しご出席された誠一氏に紹介して頂くとともに、坂本家十代の坂本匡弘氏と高山みな子氏へ贈呈することとなった。先生は式典への出席は叶わなかったが、式典にこういう形でご参加されたわけである。

梅太郎は、江戸で出会った米国人女性と結婚、ダグラス氏はその曾孫である。一方、龍馬は、亀山中設立後に才谷梅太郎を名乗るが、長崎で小曾根家に出入りする龍馬は梅太郎のことを知らされたはずで、両名の一致は偶然ではなく、龍馬が師匠の息子の名を拝借したのだと考える



長崎検番 琴音さん

河島翔馬さん

結局それは叶わなかった。その心残りを果たすのは今回しかないと思いい立ち、バンド活動をしている息子の河島翔馬さんに会い事情を説明した結果、なんと英五さんご伴侶、孫たちも一緒にファミリーでの来崎となった。そして念願だった「龍馬のように」を父の替わりに歌ってもらうことができた。もう一曲、遺作となった「旧友再会」を多くの出席者と一緒に歌うこともできた。

龍馬之像建立の想い

式典では、演奏者にも出演して頂いたが、月琴奏者の琴音さんは、龍馬の妻のお龍に月琴を教えた小曾根キクが最後の弟子だと語ったという中村きらさんの孫である。つまり、キクの月琴を引き継ぐ演奏者と言える。

今回、建つうで会の活動時から念願が叶った。銅像建立活動中の昭和63年秋に開催したイベント「龍馬の夕べ」で熱唱した河島英五さんがステージ上で「龍馬像が建ったらまた呼んでくれよな」と言われた。その言葉を忘れることはなかったが、かなり後年になって英五さんに会い、龍馬之像建立の報告と来崎をお願いしたのだが

やっと掲載でき、これで建つうで会の活動がようやく大きな区切りを迎えたと実感した次第である。今回の式典には、ご挨拶頂いた田上市長、県文化観光国際部岩田正嗣次長、全国龍馬社中橋本邦健会長、翌日のシンポジウムで講演頂いた司馬遼太郎記念館上村洋行館長様、演奏者、そして北海道から鹿児島までの各地の龍馬会会員など多くの方々に集って頂いた。30周年式典をそういう交流の場とすることができたことに改めて感謝の意を表したい。

なお、翌日のシンポジウムの様子は、式典・交流会と共に映像に記録している。

国立大学法人愛媛大学 社会連携推進機構教授
「地域連携コーディネーター」

坂本世津夫 さん

はじめに
今回は、坂本世津夫さん（愛媛大学教授）へのインタビューです。お若い頃は銀行マンだったと聞いていますが、卓越したICT能力を活かして大学で教鞭をとられるようになりました。現在は愛媛県西予市在住ですが、もとは南国市領石の坂本家先榮の地がご実家です。しかも「坂本」姓。明智伝説の伝承も含めて、大河ドラマ「麒麟がくる」の話にも発展しました。今年の現代龍馬学会の研究発表会は残念ながら中止となりましたが、来年の大会で詳しいお話をお聞かせいただけるものと期待しています。（聞き手：宮 英司）



明智家と坂本家の関係

大河ドラマの「麒麟がくる」を楽しく視聴しています。明智光秀がどのように描かれるのだろうかという期待感もあります。もう一つは、明智光秀が坂本龍馬のご先祖様ではないかという説もあると聴きました。そのあたりをわかりやすく教えてください。

今年（令和2年）、明智光秀をテーマとしたNHK大河ドラマ「麒麟がくる」が放送されています。坂本龍馬といい、明智

光秀といい、時代の転換点に現れた人物はみな土佐との関係が深いです。それは何故なのでしょう。



明智光秀 長女の墓



明智光秀 長女の墓

た内容です。

「光春が帰城した時、家臣一同は大広間に集められ、光春の妻、倫子から、ここで全部死んだら明智家は芽を吹く春がない。軍資金も均等分けて家族数を掛けて包んだ。これを持って親戚や身寄り頼り落ち延びてほしい。身寄りの無い人は親戚の四国大名長宗我部元親公に依頼状を書くからと家臣を説得中だった。家臣達は城を枕に討死玉砕と決意を述べての押し問答だった。光春は帰城するなり一同を見渡した。本能寺攻め同様に家臣は離反者や裏切り者無く、全員が揃い玉砕を希望していた。光春は妻の意見に賛同し、坂本城は明智家や妻木家の老将で籠城して戦うから妻のいう様にせよと命令した。更に我ら夫婦の子、兼助を土佐の元親公の下へ同伴してやってくれと依頼した。」とあります。

が、「龍」も同じです。光秀と龍馬は家系という点でも、意志（志）という点でも繋がっていると思います。想像してみてください。430年前まで南国市の北部には長宗我部元親の居城である岡豊城がありました。長宗我部元親は、長宗我部氏第20代当主・長宗我部国親の長男で、第21代当主です。母は、美濃斎藤氏の娘（号祥鳳）。正室は、石谷光政（足利義輝の家臣）の娘で、石谷頼辰・斎藤利三の異父妹です。側室には、明智光秀の妹の娘がいます（側室・小少将明智光秀の妹の娘）。そして、長宗我部元親の嫡男である信親（天正14年12月12日（1587年1月20日）戸次川の戦いで死亡、享年22）も、正室は石谷頼辰女となつています。

このように、長宗我部家は、国親、元親、信親と三代にわたり、美濃の斎藤家（土岐氏）関係者から夫人を迎えています。斎藤利三は、明智光秀の重臣であり、前室は斎藤道三の娘であったと言われていますが、史料的に明確なものではないようです。後室は、稲葉鉄の娘であり、斎藤利三、斎藤三存、それに末娘の福（春日局）らを産んでいます。そして、福は稲葉重通の養女となり、江戸幕府の第3代将軍徳川家光の乳母となりました。福は、山崎の戦い（天正

10年（1582年）6月3日（西暦7月2日）、古来「天王山の戦い」と言われている）の後、義理の叔父である長宗我部元親を頼り、土佐の岡豊城で過ごしたという説があります。

才谷に近い南国市亀岩には、昔坂本城がありました。その城跡には、墓石に「坂本家先祖 初代ハ亀岩坂本城々主坂本喜三兵衛天正十年近江坂本城落城後土佐二来り長曾我部元親二任ヘル父は近江坂本城々主明智左馬之助光春ト伝ハル」と書かれた墓があり、「明智左馬之助光春 妻 明智十兵衛 光秀 長女」と書かれた墓もあります。最近の墓石ではありませんが、その背後に古い墓石があり、家紋は桔梗紋（丸桔梗）です。

この古い墓石は、斎藤利三の墓と、うり二つの形状をしています。坂本龍馬の先祖（土佐での初代）にあたる坂本太郎五郎の墓は、亀岩の隣の谷である才谷にあります。太郎五郎には、本能寺の変のあと、明智光春の子どもが土佐に逃れ、旧才谷村に住み着いて百姓になったという根強い伝承があります。

以下は、明智光秀の居城であった近江坂本城落城前後の逸話として、大津市下阪本の天田省三氏より伺っ

また、明智左馬助光春の子孫、坂本龍馬の名付由来として「みずうみを渡る明智の陣羽織 墨絵の龍も天に昇りて」とも言われています。

※日本武士道的美談「唐崎の駒繁ぎ松にて愛馬大鹿毛との別れ」（西教寺）

また、最近の研究ですが、坂本太郎五郎は明智光秀の実子ではないかという説も出てきています。斎藤利三の子、福（春日の局）も、明智光秀の実子ではないかと。明智一族である土岐氏は、結局は「本能寺の変」で滅びましたが、福（斎藤利三の娘＝春日局）を要にして、徳川で再興を

「麒麟がく」 … 明智伝説と坂本龍馬

図つたのだと想像しています。そして、明智光秀も、天海として「見える、言わざる聞かざる」の中に再興を果たしたのではないかと想像しています。全ては、日光東照宮に封印されてしまったのかも知れません。そういう意味では、「本能寺の変」の目的は、いったい何であったのか。義的にはやはり、土佐にいる土岐一族を救いたいという意味もあつたのだらうと思います。織田信長にとってはやはり土佐は脅威でした。しかし、他にも理由があるのかもしれない。時代が下り、坂本龍馬が暗殺された理由(目的)は何であつたのか、光秀の「役割」と似かよっている部分があるように思えてなりません。

少しダブリますが、明智家と坂本家のつながりを明快に…。それと坂本先生とのつながりも、ぜひ教えてください。

明快に、ですか、難しいですね。以上述べたように、美濃の斎藤家、明智光秀とは長宗我部国親、元親、信親と3代に渡り深い関係がありました。理由は、斎藤家が武勇に長けており、その血が逆に入ったのではないかと思います。それが逆に織田信長や他の四国勢(三好、河野、十河)にとつては次第に脅威になつていったのではないかと考えています。

亀岩にある坂本家が、「本能寺の変」の前になるのか、後になるのか調べる必要がありますが、まだ調べていません。令和元年6月30日(日)、高知県立坂本龍馬記念館主任学芸員の亀尾美香氏、南国市岡豊町在住の窪添氏(南国市宗崎出身)と一緒に、宗崎にある「薬師」の確認に行ってきました。この薬師は、坂本家の先祖が、京都(山城の国)から逃れるときに運んできたものだそうです。そして、坂本十兵衛重家が土佐にきた最初の者であるということです。また、詳細な調査ができていません。坂本姓ですが、本能寺の変のあと日本の各地に逃れた明智光秀の家に



薬師堂と坂本十兵衛重家の墓

南予9市町の地域課題(ニーズ)と、大学のシーズを連携させる仕事をしています。昨年10月には愛媛大学地域協働センター南予が西予市宇和町に設置され、副センター長に就任しました。西予市は、長宗我部元親が四国を平定する上でも、また坂本龍馬が脱藩する上でも、非常に重要な場所です。

今、一番力を入れているのは、哲学、歴史、文学、社会学などの研究です。ギリシア哲学から、老子・莊子、ウィトゲンシュタインの言語哲学まで、幅広く研究をしています。また、異能人材を育成するために「西予開成塾」を立ち上げ、天才児教育にも取り組んでいます。

最後に、現代龍馬学会の会員へ一言お願いします。

私の先祖も、本能寺の変以降から以前は分かりませんが、400年以上前から領石(本家は亀岩に住んでいる)だと思います。当然、先祖は明智光秀と関係があるのではないかと考えていますが証拠はありません。理由は、昔は家系や重要な事柄は、嫡男(長男)に口頭で伝達するのがしきたりで、資料(書き物)として残していないからです。

地域の本当の歴史を読み解く為に

いま、愛媛大学ではどのようなことを指導されていますか？ また、先生の今後の研究テーマ、または力を入れていきたい分野を教えてください。

愛媛大学では社会連携推進機構に所属し、愛媛県南予地域の地域連携コーディネーターをしています。

研究というものは、やはり予測を立てて、それを実証していくことだと考えています。仮説、推論、実証です。トローリア遺跡を発見したハインリッヒ・シュリーマンは、幼少のころにホメロスの『イーリアス』に感動したことが、トローリア発掘を志したきっかけだったそうです。シュリーマンの時代には、インターネットという手段はありませんでしたが、現代は巨大なデータベースを串刺しにして(駆使して)、地域の本当の歴史・姿を読み解くことが可能です。単に「地域・人物の研究ではなく、歴史的な側面からも仮説を立てて、地域に足を運んで実証していくことが何よりも重要である」と思います。

坂本世津夫(さかもと・せつお)

高知県南国市生まれ。2002年4月から2005年3月まで、愛媛大学にて「地域情報学」(伊予銀行寄附部門)を担当。2005年4月から2011年3月まで、高知大学国際・地域連携センター教授(生涯学習部門長)。2014年10月より愛媛大学社会連携推進機構教授(地域連携コーディネーター・南予担当)。2019年10月より愛媛大学地域協働センター南予・副センター長。

高知県立坂本龍馬記念館現代龍馬学会 第12回総会書面議決のご報告

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、第12回総会を中止し、2020年度の事業計画や予算等の総会審議事項については書面議決を行いました。その結果は次の通りです。

会員数 119名

第1号議案(一)(C)(3)

賛成73名 反対0名 回答なし46名

第2号議案(一)(C)(2)

賛成73名 反対0名 回答なし46名

以上より規約第9条議決に基づき、すべての議案について過半数の賛成をもって可決されましたことを報告いたします。

高知県立坂本龍馬記念館現代龍馬学会
会長 宮 英司

こぼれ話 ― 犬歩棒当記(四十二) ― 歌枕を訪ねて

宮川 禎一

ひとは何のために旅をするのか？経済合理主義者には不可解だろう。家でじっとしていたら老後のお金が貯まるのに。しかし多くのひとは「非合理的な旅」に出るものだ。以下に筆者の印象に残った旅の場所をカウントダウンしてみよう。

第七位 福島県・白河の関。松平定信がここだとした古代の関所址。芭蕉の『奥の細道』や能因法師の和歌で名高い歌枕。

第六位 イタリア・フィレンツェの旧市街地の風情。イギリス映画『跳めのいい部屋』(お嬢様の修学旅行)の強い印象。

第五位 鹿児島県と宮崎県にまたがる霧島山高千穂の峰。もちろん龍馬・おりょうの登山で有名。龍馬ファン聖地だが、登ったことがないという人が多いのは残念。

第四位 エジプト・王家の谷のツタンカーメン墓。少年時代に読んだ『ツタンカーメン王の秘密』を思い出してしじみ。

第三位 岩手県遠野市のカッパ淵。柳田国男『遠野物語』から。きゅうりでカッパを釣ろうとする仕掛けあり。釣れないけど。

第二位 イギリス・ロンドンのアビーロード。ビートルズのアルバムジャケットでおなじみの横断歩道。世界遺産になっていますよね？え、まだなの？

第一位 栃木県足利市の渡良瀬橋。昨年、足利学校を見学して、案内所で観光パンフを手にしたら、森高千里の楽曲「渡良瀬橋」がすぐその橋だとあつて仰天。なんとなく渡良瀬川にかかる橋はみんなそんな名前かと思っていたが、橋のそばに歌碑まであつてびっくり。これほど故郷と昔の恋をせつなく歌った名曲が他にあるでしゅうか。まさに「夕日がきれいな街」「風邪をひいちゃいました」ですよ。行けて良かった。

ひとは「歌枕」を訪ねるもの。物語の力で動かされる旅人ですよね。



足利市の渡良瀬橋(車道鉄橋)

“話してみるかよ”

「歴史的に意義のある墓地」

岡上 汎告(坂本乙女の曾孫)

高知市丹中山の坂本家の墓地から南西や下方に、岡上家墓地が見える。しかし、その存在を知る人はごく僅かだろう。坂本家墓地からゆっくり歩いて3、4分ほどの所だ。時折参拝して下さる方もいるらしく、小銭や菓子など、時には酒の小瓶が岡上新甫の墓前にある。新甫以前の岡上家代々の墓地は高知市薊野の真宗寺山の4か所にある。

時は安政5(1858)年に遡る。この年、岡上新甫と坂本乙女の間長男・赦太郎が生まれた。因みに、坂本龍馬が乙女に宛てた手紙に記した社太郎はこの赦太郎であり、龍馬の当て字である。

それはさておき、赦太郎は明治4(1871)年1月29日14歳にして病没した。大変可愛がっていた夫妻は嘆き悲しんだことだろう。当時の上町から真宗寺山はかなり遠い、丹中山ならすぐ近くである。恐らく乙女の計らいで坂本家墓地の近くに土地を求めたと思う。そして、夫妻は交代で赦太郎の夜伽をした。そのとき新甫は雨に打たれて風邪をひき、それが元で病没した。明治4年7月3日享年56歳で、赦太郎没後僅か5か月後のことであった。

さて、現在の岡上家墓地の周辺は新興住宅地となっているが、小生が若かりし頃は、この周辺はきれいな湖沼(池)で鯉や鮒などの魚影も見られた景色の良いところであった。数年前、歴史写真家の方から言われた。「汎告さん、この岡上家墓地は坂本家との縁故から考えて、歴史的に意義のある場所じゃき、絶対に他所へ移したらいかんぜよ！」と。



岡上家墓地と背景にある湖沼(池)。筆者の母・綾子(花飾りのある十字架)の埋葬式。筆者は26歳(右端)=昭和41(1966)年4月、高知市丹中山で

コラム・龍馬のこと

「龍馬を描く」

江本象岳(仏画家)

寺院の求めに応じて絵を描くのが私の本業であるが、折々好き勝手に龍馬を描きはじめてのは、誕生日、次男坊、大柄などと共通点を見付けては楽しくなり、ちょっと筆を走らせたのが抑々のきっかけであった。

龍馬を描くに外せない三つの特徴がある。

「蓬髪」「紋付」「ブーツ」である。

乱れ髪は最も龍馬らしいから外せない第一の条件、家紋は坂本家というより、龍馬を限定できて外せない。そして全身像となるとやはりブーツは入れたい。

台に寄り掛かった有名な写真、ブーツを履き遠望する様な眼差し、更に手を組み刀を落し差しにした様なもう一枚の写真、いずれもブーツがバッチリ。

遠望というより「近視だから」という声もある。「ブーツ」は撮影用の小道具という声もある。が、描く時にはその声は聞こえない。もとより学術的な意味は無いのだから好きに遊ぶ。

龍馬は乱れ髪の方が、そしてブーツを履いて闊歩する方がよく似合う。

海外との交易を目指していたというから、二隻きの隊旗を翻して波頭を乗り越えて進む遠望の図という方が絵になる。

龍馬を中心に海援隊を描いた。顔のわからない人は想像で補う。後年、政府の要人となり威厳ある髭をたくわえた姿の、陸奥宗光など、時代の雰囲気が出て面白いと、他の侍姿の隊士達の中に描き入れたり、海援隊設立時には、既に故人となっている近藤長次郎、池内蔵太も当然入れた。

いやはや絵とは楽しい、一つの画面に時間を超越して人物達が並ぶ。さて又、ポチポチ龍馬と画面の中で遊びましょうか。

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会
〒781-0262 高知市浦戸城山 830

TEL (088) 841-0001 FAX (088) 841-0015
mail:gendai-ryoma@kochi-bunkazaidan.or.jp